

大自然を司る 聖女

王宮を見捨て 辺境で

楽しく生きていく!

Daishizen wo tsukasadoru seijo,
oukyuu wo misute henkyou de tanoshiku ikiteiku!

3

◆ 著 末松 樹

◆ 絵 中條由良





イゴール

ダークエルフの里の次期族長。
真面目な性格で、
責任感に溢れている。

ペルーン

雷を司る神。
好戦的で威圧的。

セマルグル

気高きグリフォン。
辺境の魔物が慌てて
逃げ出すほど強い。

ヴォーロス

ライトニング・ベアと呼ばれる、
雷魔法を使う熊。
普段は紳士的だが、
怒ると怖い。

シルヴァ

元冒険者の少年。
王国で暮らしていたが、
ひょんなことから辺境へ。

バステト

人間の姿にも変身できる
猫の神様。
息子への愛情が深い。

セシリア

自然にまつわる魔法を
使いこなす元聖女。
追放されたショックで
前世の記憶を取り戻す。

ユーリ

セシリアを一番近くで
見守る相棒。
一見普通のリリスだが、
実は魔法が使える。

登場人物紹介

プロローグ 辺境の楽しい生活

私、セシリア・ルイスは、王宮で土の聖女と呼ばれていたのだけど、第二王子ルーファス様の勘違いによって、辺境の地ジャトランへ追放されてしまった。

だけど、前世——日本の家電メーカーで開発を行っていた元日本人だということを思い出し、三つの土魔法を駆使して、快適に過ごせるようになる。

まず一つは、『具現化魔法』。これは、植物の種を出したり、鋤物を思い描いた形で生み出したり出来る魔法だ。

この魔法を使えば、日本人の時の知識と合わせて、家電を再現可能なのよね。

また、『育成魔法』を使えば植えた種がすぐに育つので、食べ物に困らない。

主にこれら二つのおかげで、辺境での生活はかなり豊かになった。

そして、三つ目の魔法——『防御魔法』で、守りもバッチリ。魔物が現れるジャトランでも安全に暮らせるのは、これがあるからだ。

そんなわけで、私の土魔法はかなり有用！ ……なんだけど、地味でルーファス王子には凄さが

伝わらなかったみたい。『聖女と呼ばれているくせに何もしていないのは何事だ！』って難癖付けられて追い出されてしまったのよね。

しかも、自分で追放したクセに、私がいないと国の資源が足りないらしく、ルーファス王子は私を強引に連れ戻しに来た。

でも、辺境で出会った仲間達と協力して、それも撃退！

今は索敵魔法を使えるリスのユーリや、雷魔法が使える熊のヴォーロスに、治癒魔法が使えるグリフォンのセマルグルさん……私が作り出した果物『知恵の実』を食べたことで会話ができるようになったモフモフたちと暮らしている。

みんなは頼りになるし、一緒にいると寂しくないどころか、凄く楽しい。

他にも、猫の神様で人の姿にもなれるバステトさんとその息子のマヘス君とか、建築が得意なコボルトさんたち。大地の女神様のモコシさんや、アース・スライムのスーさんたちとも知り合うことが出来たしね！

そうそう、王国の冒険者だったシルヴァとも仲良くなれた。

彼はつい先日、ジャトランに記憶を喪った状態で漂着した。

その原因を紐解いていくと、第一王子アルバス様が私の能力を利用するために魔道具で彼の記憶を封印、この島に送り込んだのだとわかった。

みんなに助けてもらって、シルヴァは無事に記憶を取り戻すことが出来たし、アルバス様にもお仕置きして、一件落着。

今はコボルトさんたちが建ててくれた、大きな二階建ての家で、シルヴァを含めたみんなで平和な日々を送っている。

日本の家電や和食はある程度再現出来るようになったし、電車や小型のボートも作って、立派な家に住めるようになった。

さて、次は何をしようかな？

第一章 元日本人のセシリア

「んー、この家はとても良いのじゃ。床に絨毯が敷かれておる上に、窓が大きいからお日様がポカポカで、日向ぼっこが最高のじゃ」

「あの、バステトさん。この家が出来てから、毎日二階でゴロゴロしている気がするんですけど」
家の掃除をしていたら、バステトさんがゴロゴロしているのが目に入る。

今は、人間の姿だ。

猫の姿だと、お昼寝していても、まあ猫だし……と気にならなかつたけど、こっちの姿だと途端に気になってしまうのは何故だろうか。

「まあまあ、セシリアよ。少しくらい、良いではないか。妾の寝床にはこのような絨毯はないし、日向ぼっこをしようと思うと、石の上で寝ることになってしまふのじゃ」

「えっと、今はシルヴァもいますし、女性の姿で大の字になって寝るのはちよつと……」

「むう。妾は別に何を見られようとも、全く気にならぬのじゃが……仕方がない。猫の姿で日向ぼっこするのじゃ」

うーん。まあ女性の姿でゴロゴロしているよりは、良いかな？

まあ正直、シルヴァを今後どうするかという問題の方がよっぽど悩みの種よね。

私は王宮を追放されてこの地へやってきたけど、具現化魔法と元日本人の知識で家電などを自由に再現できるここでの暮らしの方が快適なので、戻りたくないと思っっている。

王国で家電なんて再現したら、間違いなく騒ぎになるだろうし、何よりこちらにはユーリやヴォーロスに、セマルグルさんたちもいるしね。

でもシルヴァはアルバス王子に利用されて、無理矢理この辺境のジャトランへ来ることになってしまっただけ。ほとぼりが冷めるまで暫く帰れないというだけで、本当はこの地での暮らしをどう思っているのだろう。

「うーん。一人で考えても埒が明かないわね」

こういう時は、誰かに相談するべきだろうと、ユーリを探す。

普段は私の肩に乗っているんだけど、以前ちりとの中へユーリが入って来たのに気付かず、私がホウキでゴミや埃を押し込んでしま……あれ以来、私が掃除をしている時だけ、逃げるようにどこかへ行ってしまふのよね。

以前は掃き掃除をしていなかったから、ちりとりが何かわからなかったのだと思うんだけど……可哀想なことをしてしまった。

とはいえ、前の石で作った家に住んでいた時は多少の汚れは気にならなかつたけど、これだけ立派な家に住んでいたら、そももいかない。

「ユーリー」

「ん？ セシリアー、どうしたのー？ お掃除は終わったー？」

声が出た方を見ると……猫の姿で日向ぼっこをしているマヘス君の隣にいた。

どうやら、ユーリも一緒に日向ぼっこをしていたみたいね。

というわけで、私も窓際に行き、カーペットの上に腰をおろすと、ユーリの意見を聞いてみる。

「……というわけで、シルヴァは暫くしたら元いた国へ帰ってあげた方が良いのかなって思っただけど、どう思う？」

「うーん。ユーリにはわからないから……本人に聞いてみるのが良いんじゃないかなー？ 周りが勝手に推測するよりも、確実だと思うしー」

ユーリの言葉を聞いて、確かにそうかも……と思っていると、バステトさんが再び女性の姿に戻り、身体を起こす。

「ふむ。セシリアは、あの少年を気に掛けておるのじゃな？」

「ええ。特にお仕事のことかね。シルヴァは冒険者だと言っていたけど、ここには冒険者ギルドなんてないし、出世というか、昇格みたいなことも出来ないでしょうし」

私は冒険者ギルドの仕組みは知らないけど、働いていなければ当然評価されないと思うんだよね。もしもシルヴァが冒険者のランクみたいなのを上げたいと思ってるのなら、このジャトランにいたら、それが実現出来ないわけだしさ。

「ふむ。人間族は大変なのじゃ。寝て、美味しいものを食べて、親しい者たちと一緒にすごせればそれで良いと思うのじゃが」

「働かないと、その美味しいものが食べられないので……」

「うむ。尤もなのじゃ。妾も、時々は鬼人族の街を護りに戻るとするのじゃ」

バステトさんがそう言って、猫の姿に戻り……結局寝るのっ!? 今の話の流れからすると、鬼人族さんたちの街へ帰る感じだったでしょ！

いえ、別に出て行って欲しいというわけではないんだけどさ、鬼人族さんの街が大丈夫なのかなあとと思う。バステトさんは鬼人族の守り神だ。

そんな彼女が街から離れた私の家で、ずっとゴロゴロしているのは、いかがなものだろう。

まあ、私が口を出す話でもないわね。

「じゃあ、ひとまずシルヴァに直接聞いてこようかな」

「ユーリも行くよー」

このポカポカと陽が射す窓辺にいと、ついお昼寝したくなってしまいそうなので、ユーリが肩に乗るのを待って、立ち上がる。

この時間だと、シルヴァは装備の手入れをしていると思うので、家の裏の軒下へ。

そこには予想通りシルヴァがいて、手慣れた様子で短剣に何かを塗っていた。

「ん？ セシリア。どうかしたのかな？」

「ううん。邪魔としては悪いから、終わるまで待つているわ」

「いや、集中力を要するところはもう終わっているし、昔からずっとやっている作業だから大丈夫だよ」

昔からずっとやっている作業ってことは、やっぱり長年冒険者をしてきたってことよね。やっぱり元の職に戻りたいのかな……？

いやいや、ユーリの言う通り、それは私の勝手な推測にすぎないわ。

シルヴァの意見を聞かなきゃ。

「あのね、シルヴァ。アルバス王子の一件があるから、ほとぼりが冷めるまではジャトランにいると思うんだけど、その後はやっぱり元々いたソルヴィア王国に戻りたいよね？」

「え？ 特に元の国に執着はないかなあ。あ、ここを出て行けっという話なら、仕方がないけどさ……」

「そ、そういう意味じゃないの！ そうではなくて、冒険者を長年しているって話だし、同じ職に戻りたいんじゃないかなって思っ」

「いや、ギルドに所属していないと、いろいろと面倒だから冒険者ギルドに登録していただいただけだね。狩人でも農夫でも、食べていけるなら、なんだって大丈夫だよ？」

なるほど。シルヴァに限定した話かどうかはわからないけど、この世界では、キャリアを積み重ねるといふより、とにかく生きていくことが大事って感じなのかな？

流石に、騎士とか宮廷魔術師とかになると、話が違ってきそうだけど。

「じゃあシルヴァは、特にソルヴィア王国に戻りたいとか、もう一度冒険者に戻りたいって気持ちがあるわけではないのね」

「うん、その通りだよ」

そっか。じゃあ、急いで船や飛行機を作らなくても良いわね。

さて、それじゃあまた考えなきゃいけないことがある。

私は日本の家電を再現して快適に暮らしたいとか、懐かしい和食を再現して食べたいとかっという目標があつて、それなりに実現してきた。

シルヴァは何かしたいことはないのかな？

「……じゃあ、シルヴァは何かしたいこととか、欲しいものとかはある？」

「そうだね。セシリアが作ってくれるご飯は美味しいし、この短剣を手入れする道具もコボルトさんたちがくれたし……」

「特に何もないのかな？」

「うーん。しいて言うなら、せっかく未開の地、ジャトランへ来たのだから、探索してみたいっていう気持ちはあるかな」

探索かあ。確かに私も、このジャトランについて、まだまだわからないことだらけだ。

西と南はすぐ海だけど、北はケンタウロス族さんたちの村がある山まで、東はコボルトさんたちの街までしか行っていない。

セマルグルさんによると、ジャトランはもっと広いみたいだしね。実際、アース・スライムのスーさんは元々火山に棲んでいて……あっ！ そうだ！ 火山があるなら、きっとアレがあるはず

よねっ！

アレは幾ら頑張っても具現化魔法では再現出来ないし、是非とも探索して見つけてみたい。

「ねえ、シルヴァ。じゃあ、私が行ってみたい場所があるんだけど、一緒に行ってみない？ といつても、たぶんあるだろうって思っているだけで、実際にあるかどうかは、行ってみないとわからないんだけど」

「もちろん、良いとも！ セシリアには何から何までお世話になっているしね。セシリアが行きたい場所があるなら、僕は全力で見つけてみせるよ！」

シルヴァが即答してくれたので、早速セマルグルさんにも頼んで……あ、でも、空から一気に行っちゃうと、シルヴァの探索欲を満たせなくなっちゃうか。

そうなると、セマルグルさんから方角だけ教えてもらって、歩いて行くべきなのかな？

なんにせよ、一度みんなに相談してみよう。

でも、まずは腹ごしらえ。

そう思い、夕食作りに取り掛かる。

料理の下ごしらえを済ませたら、ヴォーロスに来てもらい、自作のオーブンに弱い雷魔法を使ってもらう。このヴォーロスの雷——電気力のおかげで、オーブンを始めとした、様々な家電が使

えるのよね。

ヴォーロスに感謝しながら、焼き上がりを待ち……出来たっ！ 今日はお昼にシルヴァがたくさ^{ぎょがら}ん魚介類を獲って来てくれたので、鯛^鯛を使ったアクアパツアに挑戦してみた。潮^潮とハーブの香りが鼻をくすぐる一品に、パンとサラダを添^そえて完成っ！

「みんなー、ごはんだよー！」

「わーい！ セシリア、ありがとー！」

「どんな料理か楽しみだねー」

みんなに声を掛けると、私の肩に乗っていたユーリとヴォーロスがテーブルに降り、続いてバス^{バス}テトさんとマヘス君がやってきた。

「おおっ！ これは……うむ！ いただくのじゃ」

「うわあっ！ おねーちゃん、ありがとー！」

大きな鯛が丸ごと載った大皿を見て、二人は目を輝^{かがや}かせる。

ちゃんと取り分けるから、待つてね？ あと、出来立てで熱いからね？

それから、シルヴァとセマルグルさんもやって来た。

私の希望通り、大きなヴォーロスやセマルグルさんが入れる広いビングを作ってくれたコボルトさんたちには本当に感謝ね。

「ふむ。魚を野菜と一緒に食べるというのは珍しいな」

興味深げなセマルグルさんに、私は言う。

「アクアパッツアっていう料理なの。あと、セマルグルさんはちゃんとサラダも食べましょね」

「うぐっ……う、うむ」

私の指摘でたじろいでいるけど、注意しないとセマルグルさんは野菜を食べないからね。

ちなみに、その横でお魚にかじりついているマヘス君にも同じことが言えるんだけど……バステトさんと共にお魚に夢中かぁ。二人も、ちゃんと野菜を食べようね。

それから私は家の裏へ。

「スーさん。今日はブドウにしたよー」

「アリガトー！」

アース・スライムのスーさんはなんでも食べるけど、果物が好きみたい。

あと、モフモフ……ではなく、家で飼っているモコモコな羊のモビにもご飯をあげて、私も夕食をいただく。

そして、ある程度みんなが食べ終わった頃に、先程の探索の話を切り出してみた。

「あのね、みんなに相談があって……ちょっと行ってみたい場所があるの」

「ふむ。どこへ行きたいのだ？ 我が連れて行ってやろうではないか」

「あ、セマルグルさんに協力はして欲しいんだけど、乗せて行ってもらうのはちょっと違って、今回は歩いて行きたいのよ」

ちよつと寂しそうにしているセマルグルさんに謝りつつ、シルヴァの探検欲を満足させてあげたいのだと説明する。

「むう……あまり遠い場所でなければ良いのではないか？ して、セシリアはどこへ行きたいのだ？」

「前に、セマルグルさんがスーさんを火山から連れて来てくれたでしょ？」

「うむ。セシリアが硫黄を元にした酸が欲しいと言った時のことだな」

いろいろあつて、鉛蓄電池に必要な硫酸を作ろうとしていたところ、セマルグルさんが火山からスーさんを連れて来てくれたんだよね。

そのおかげで、硫酸を自作せずに済んだので、物凄く助かったんだ。

「その、火山に行きたいのよ」

「……セシリアが……か？」

「ええ」

「私の背に乗らず、徒歩で……なのか？」

「そうだけど……難しいかな？」

セマルグルさんが、いつになく険しい表情を浮かべている。

確か、スーさんを連れて来てくれた時は、三時間くらいで行って帰って来なかったっけ？ 時計がないから、なんとなくの感覚でしかないけど。

「うーむ。陸続きではあるから、行けないことはないが、難しい理由が二つあるな」
「その理由って？」

「一つは、単純に遠いのだ。我が誰も乗せずに空を飛ぶ速度と、徒歩で歩く速度では雲泥の差がある。火山はあのモコシがいる山よりも、もっと遠いのだ」

モコシさんがいる山は、歩けば半日くらい掛かるコボルトさんたちの街から、更に北へ行っただころだ。それよりも遠いと言われると、確かに徒歩だと難しいかもしれない。

そして、セマルグルさんがもう一つの理由を説明する。

「二つめに、徒歩で行く場合は、『迷いの森』を通らねばならぬのだ」

「迷いの森!?」

「うむ。ダークエルフという種族が住んでいる森で、足を踏み入れると闇魔法で方向感覚が狂わされるらしい」

「ダークエルフっていう種族がいるのね。どうせなら、仲良く出来ないかな？」

「それはなんとも言えぬな。あまり良い話を聞いたことがないが……」

うーん。こういう風に言われると、セマルグルさんに乗せて行ってもらった方が良い気もする。いやでも、それだと私の目的は果たせても、探索したいっていうシルヴァの希望が叶えられない。私から聞いておいて、自分の目的だけ達して、シルヴァの目的をないがしろにするのもどうかと思っし。

……ダークエルフさんたちが使う闇魔法は、私の防御魔法で防ぐことが出来るので、森の中で迷うことはないはずだ。

だけど、魔法防御か状態異常の防御を使うと、物理的な防御が出来なくなるので、そこが課題かな。

どうしようかと考えていると、ヴォーロスが口を開く。

「ところで、どうしてセシリアは火山にいきたいんだい？」

「えっとね、火山の近くに私が探しているものがあると思うのよ」

「探しているもの？」

「ええ。温泉ってわかるかな？ 地面の下から温かいお湯が湧き出ている泉のことなんだけど」

「温泉……僕は聞いたことがないけど、みんなはどうかな？」

ヴォーロスがみんなを見渡すけど、残念ながら誰も知らないみたい。

うーん。入ると凄く気持ち良いんだけどなあ。

この家にはお風呂があつて、滝から水を引いており、それを加熱してお湯にしている。普段使いならそれで十分なんだけど、やっぱり温泉の効能こうのうというか……お風呂とはまた違う気持ち良さがあるんだよね。

ヴォーロスもきつと気に入ってくれると思うんだけど。

「ふむ。話は聞かせてもらったのじゃが……セシリアが行くということは、セマルグルやヴォーロスも行くのじゃろ？ であれば、なんの問題もないのじゃ」

「確かに、我らが同行すれば、セシリアに怪我けがをさせるようなことにはならないはずだ」

「そうだね。何があつても、守ってみせるよ」

バステトさんの言葉に、セマルグルさんとヴォーロスが力強く頷いてくれた。

私だけではなくて、シルヴァやユーリも守ってもらいたいけど、もちろん一緒に守ってくれると思う。

ダークエルフの闇魔法は私が防げると思うから、これなら大丈夫かな。

「あっ！ でも、歩いて行くとなると、かなり時間が掛かっちゃうわね。その間、この家はどうしよう」

「それは妾に任せるのじゃ。マヘスと共に、しっかりと留守番るすばんしておくのじゃ」

バステトさんは、放っておいたら、ずっと二階でゴロゴロしていそうだけど……お留守番るすばんしてい

う意味では、その方が良いのかも。

それから、行きはシルヴァの探索欲を満たすためにも歩いて行って、帰りはセマルグルさんに乗せてもらおうとかついていうのもアリかもしれない。

まあこれはまた、帰る時に相談しようかな。

「じゃあ、そういうわけで、明日の朝から温泉探しに出発ね！ お弁当を作らなきゃ」

「わーい！ セシリアのお弁当だー！」

「セ、セシリアよ。妾たちの分も頼むのじゃ。出来れば、さっきのような魚料理が良いのじゃ」

早速ユーリとバステトさんから、お弁当の中身のリクエストを受けてしまった。

とはいえ今日はもう遅いので、お弁当作りは明日ね。

そんなわけで、ひとまず話がまとまったので、今日は就寝しゅうしんすることにした。

新しい家にはベッドもあるんだけど、これまで通りモフモフのヴォーロスの上で眠らせてもらいながら、明日のお弁当の中身を考える。

ユーリはフルーツ、バステトさんとマヘス君はお魚。セマルグルさんはお肉とチーズを希望していて……いや、これを全部満たすお弁当お弁当って難しくない!? お弁当お弁当でなければ、ピザが適しているんだけど、アツアツが食べたいよね！

翌朝。いつもより早く起きると、みんなを起こさないようにキッチンへ。ヴォーロスがまだ眠っているの、オープンが使えない……と、困っていたのは、過去のことだ。今は、コボルトさんたちが作ってくれたカマドもあるし、蓄電池を使った小さめのオープンもある。

なので、早速朝食作りに取り掛かる。具現化魔法で作りに出した土鍋どなべにお米を入れてカマドへ。沸騰ふちぎしたら貝やエビを入れ、後は弱火でじっくり煮込むだけ。

昨日、寝る前にいろいろと考えてみたけど、魚介類を使ったお弁当は鮮度的にどうかと思ったので、朝食で出してあげることにした。

お弁当ではないけれど、バステトさんたちも満足してくれると思う。

それから次は、お弁当作り。

持ち運びやすさとか、作る時間のことを考えると、これまで何度も作ってきているけど、サンドイッチがお手軽なのよね。

というわけで、パンにいろんな具材はざを挟んでカットしていき、私たちの分とバステトさんたちの分をそれぞれ用意しておいた。

「ん……良い匂いなのじゃ」

「バステトさん、おはようございます。随分と早いですね」

「うむ。なんだか、物凄く美味しそうな香りがして、起きてしまったのじゃ」

「お弁当の代わりに、朝ごはんは魚介類を使ってみたんです」

「おお！ 流石はセシリアなのじゃ！」

そんな話をしていると、マヘス君も起きてきて、眠そうに目をこすりながらバステトさんの隣に座る。

二人は夜行性ということもあって、一番起きるのが遅いんだけど、今日は作った朝ごはん——海か鮮粥せんがゆの効果が抜群だったみたい。

それから、ユーリやシルヴァたちも起きてきたので、みんなで朝食を食べた。

バステトさんとマヘスくんはもちろん、他のみんなにも好評でよかった！

朝食を渡し、支度を整えたらバステトさんにお弁当を渡して——

「じゃあ、いよいよ出発ね！」

「セシリアは随分張り切っているんだね」

「もちろん！ だって、温泉を目指すんだもの！」

ヴォーロスが驚おどろいているけど、もしかしたら探索したいというシルヴァよりも、気持ちが逸はつ

ているかもしれないわね。

「セマルグルさん。モコシさんの山よりも向こうということは、北東に向かつて進めば良いのかな？」

「うむ、その通りだ。ヴォーロスの雷魔法を使った電車に乗って、コボルトの街まで行くと良いだろう。あの街から更に東へ行つて、北上するイメージだ」

セマルグルさんが火山のある方角を教えてくださいましたので、次はヴォーロスに頼んで電車を家の近くまで動かしてもらった。

「じゃあ、みんな！ まずはコボルトさんたちの街まで行くから乗ってー！」

私の呼び掛けに応じ、シルヴァたちが電車に乗り、セマルグルさんは二両目の荷物用の車両に座り込む。

「セシリアよ。留守の間、この家は妾に任せるのじゃ」

「はい。よろしくお願ひします」

「おねーちゃん、きをつけてねー！」

バステトさんとマヘス君に見送られながら、ヴォーロスが電車を出発させる。

日本の電車やセマルグルさんが飛ぶ速度には劣るけど、それでも十分な速度が出ていて、窓から見える景色がどんどん後ろに流れていく。

あつという間にシルヴァと出会った浜辺を通りすぎ、池のほとりに敷いたレールを走つて、コボルトさんたちの街の前へ到着した。

「じゃあ、ここからは徒歩ね。北東へ向かえば良いのよね？」

「うむ。空から、方角を確認しよう」

「あ、待つて待つて。そういうのも今回は最小限にしておこうかなって」

「ううむ。セシリアがそう言うのであれば……」

セマルグルさんには申しわけないけれど、ここからはシルヴァの探索の時間だからね。

シルヴァを先頭に、私とヴォーロスが続ぎ、セマルグルさんは空から見守ると言つて、私たちの上を飛んでいる。

ちなみに、モーターにも使っている磁石を具現化魔法で作し出し、それを紐で吊るすことによつて、簡易のコンパスを用意した。これなら、森の中に入つても迷わないでしょ。セマルグルさんの言つていた、迷いの森も闇魔法を防御魔法で防ぐし。

そんなことを考えながら、北東に向かつて歩き続け、幅が一メートル程の小さな川に差し掛かった。

「あ、セシリアー。これって、この前作つた川だよな？」

「そう。水車が無事に動いているみたいね」



以前、コボルトさんたちの街で、神様の呪いによって木が生えなくなるという事件が起こった。モコシさんから、この呪いを解くには二つの川を繋ぐ必要があるって言われて、水車を作って対応したんだよね。

せっかくなので川の水を汲み、ついでに具現化魔法で橋も作っておく。

小さな川だから、向こうへ渡れない……って困る人はいないと思うけど、一応作った橋は残しておこうと思う。

そのまま先へ進むと、良い感じの石を見つけたので、テーブル代わりにしてお弁当のサンドイッチを食べる。

お昼ご飯の休憩を挟んで、再び歩き出し……特に何事もなく夕方を迎えた。

「えっと、そろそろ野営をしようと思うんだけど……向こうに水の音が聞こえるから、少し移動しよう」

シルヴァが耳を澄ましてから指し示した方角へ行ってみると、お屋前に渡った川よりも、更に小さな川があったので、今日はここで野営をすることにした。

ただ、間近で聞いても水の音は小さいのに、よくあの距離から聞こえるものだなと感心してしまっ。

そんなことを考えながら、具現化魔法で石の家を作ると、セマルグルさんが降りてきた。

「ふむ。今日はここで野営をするのだな？」

「ええ。川もあるし、広くて良い場所じゃないかなって」

「そうだな。ここならば、セシリアもいろいろと作業がしやすいであろう」

小さいけど川があつて、平地で、周りに障害物があまりない……家が出来る前の拠点きょてんに似ている気がする。

なので、つい周りに畑とかを作りたくなくなってしまっけど、ここに住むわけではないし、植物を出すのは最低限にしておかないとね。

「じゃあ、僕は何か狩ってくるよ。ウサギや鳥が見つければ良いんだけど……」

「んー、じゃあユーリと一緒にっこうか？ 索敵魔法で、何処に生き物があるかわかるよー？」

「それはありがたい。是非、お願いするよ」

シルヴァがユーリと一緒に、北に見える森の方へと向かつて行く。

夕方に森へ入って大丈夫なのかなと思っただけど、ユーリがいるなら平気かな。もし真っ暗になつても、索敵魔法で私たちの位置がわかると思うし。

シルヴァを待つ間、私は具現化魔法で簡易オーブンや、テーブルにイスを作っておく。

ただ、今からここで小麦やお米を収穫しゆわくして、粉にしたり脱穀だつかくしたりするのは難しそうなので、今

日の夕食はお芋いもをメインにしようっと。

「セシリア。これは……お芋？」

「うん。今日はサツマイモを使おうかなって思っ……えいつ！」

ヴォーロスと話しながら、サツマイモの蔓つづを思いっきり引っ張ってみただけど、ビクともしない。

大きなお芋の方が良いだろうと思っただけど、育成魔法で育てすぎたのかも。

ただ、見かねたヴォーロスが代わりに引っ張ってくれて……少しも力を入れていないように見えるのに、簡単に大きなサツマイモが沢山出てきた！

そのサツマイモと蔓を切り分け、まずはお芋を川で水洗いする。水気を切ったら、具現化魔法で作り出したアルミホイルでお芋を包み、オーブンへ。

ヴォーロスに雷魔法を使ってもらい、オーブンで温めている間に、次は蔓の方ね。

サツマイモの蔓は食べる事が出来るので、これも綺麗に洗い、長さを切り揃えておく。

あとは、シルヴァが獲つて来たお肉と一緒に炒めいたようと思うんだけど……狩りの成果はどうかな？

「ただいまー」

「セシリアー！ シルヴァ、凄いいよー！ 木の上にいる鳥を、矢でスパスパ狩っていくんだー」

シルヴァとユーリが、鳥肉みたいなものを沢山持つて帰ってきてくれた。

既に羽根や内臓などの下処理は済んでいるようで、日本のスーパーとかで売られているような状態……は流石に言いすぎとしても、すぐに調理出来そうだ。

というわけで、胡椒とバジル、オレガノとパセリの香辛料と香草を生やし、鳥肉に下味を付けると、食べやすい大きさに切つてからオーブンへ。

「うーん。これが家なら、いろんな調味料があつて、もつと美味しく食べられるんだけどなー」

「いやいや、野営でちゃんとした料理が食べられるだけでも十分だよ。だいたいは、焚き火を熾して、串刺しにした肉を炙つてかじりつくだけだからね」

「そうなの？ シルヴァは結構料理が出来そうなの」

「残念ながら切るのは出来るけど、セシリアが出した香草なんて、持っていないどころか、あつてもどうすれば良いかわからないからね」

あー、確かに料理していない人は香草の扱いに困るかも。肉の臭みを消したり、風味付けしたりと、いろんなことに使えるんだけどね。

シルヴァと話をしている間に、お肉もお芋も焼けたので、早速皆でいただく。

「ふむ。これは、ただの鳥肉と思つたが、香りが良いな。臭みも全くない」

「セシリアが作つたんだから当然だよー！ このお芋も甘いよー！」

セマルグルさんやユーリたちが美味しそうに食べ、雷魔法を使つてくれたヴォーロスに感謝し、

後片付けを終える。

そのまま小川へ移動すると、布を濡らしてそれで汗を拭き、防御魔法で周囲を覆つて就寝した。

翌朝も同じ様に朝食を済ませ、作つた石の家を消し、昨日と同じ様に北へ向かつて歩いて行くんだけど……うん。本当に平和ね。

この先、ダークエルフが現れる迷いの森だつていう話だけど、このままずっと平穏無事に進むと良いな。

でも、こんな平和な歩みじゃ、ちよつとシルヴァには物足りないかも。

「うーん……ちよつと異常なくらい、魔物がいないなあ」

「そうなの？」

「うん。昨日、僕とユーリだけでこの森の中へ入つたんだけど、鳥だけではなくて、兎とか鹿とか、いろんな魔物がいたんだ。だけど、今は見ての通りなんにも現れないでしょ？」

「まあ確かに……」

私としては、魔物が現れない方が良いんだけど、シルヴァには物足りないのかな？ これだと、探索というよりはピクニックと言つた方が良くない。

「けど、昨日はたくさん魔物がいたんだよね？ それなのに、どうして今日はいないんだろ？」

「まあ、理由は明確だがな」

私の眩きに、後ろを歩いていたセマルグルさんが答えてくれる。

「我とヴォーロスがいるのだ。普通の魔物は逃げ出すであろう」

「あー、なるほど。セマルグルさんたちがいたら、確かに逃げちゃうねー」

シルヴァが納得したようで、うんうんと頷いているけど、そういうものなのかな？ 別にセマルグルさんもヴォーロスも大きな音を立てて歩いているわけではないんだけど。私には気にならない程度の音でも、周りに棲む魔物たちは逃げてしまうってこと？

あ、でも、前にヴォーロスと一緒に森へ入った時も、魔物が逃げて行った気がする。

「ふむ。シルヴァとしては、ただ歩いているだけになってしまふということであれば……そうだな。我がセシリアと共に別の場所へ行くというのはどうだ？」

「えっ!? 私も？」

「うむ。おそらく、シルヴァは多少魔物と戦いたいのであろう。だが、我やヴォーロスがいらない状況で、魔物の群れに遭遇するのは危険だ。セシリアは別に魔物と戦いたいわけではないのである？」

「ま、まあ……戦いたくはないかな」

「そうであろう。……そうだな。あくまで一案だが、セシリアは探索のサポートとして、昼と夜に

我に乗って食事を届けるというのはどうであろうか」

えーっと、出前かな？

けど、この案は私からすると、強く反対する程ではない。というのも、昨日のお昼はお弁当を作ってもってきていたから良かったものの、夕食は結構困ったんだよね。

食材はシルヴァが狩ってきてくれるものの、使える調味料が少なすぎる。それに、小麦粉やお米もないので、メインがずっとお芋になってしまいそうなのよ。

まあそもそも、探索に来ておいて、贅沢ぜいたく言うなって話だけど。

「シルヴァはどう思う？」

「えっ!? うーん……まず、セシリアを危険な目に遭あわせたくないっていうのは同感かな。その上で、セシリアが探している温泉を見つけれればって思う」

じゃあ、どうするのが最も良いのだろうかと皆で歩きながら話し、最終的にセマルグルさんの案になった。

「では、我はセシリアを運んで家に戻る。また昼頃に来るので、狼煙のろしをあげるように」

セマルグルさんの言葉に、ヴォーロスとユーリが頷く。

「僕は少し距離を取って歩くようにするね。大丈夫だとは思うけど、何かあったらすぐに助けるから」

「ユーリはシルヴァと一緒にいて索敵魔法を使うけど、危険だと思ったらすぐにヴォーロスを呼びに行くねー」

昨日、一日掛けてコボルトさんの街から歩いたけど、セマルグルさんの背に乗せてもらったら、あつという間に家へ帰れてしまった。

「む？ セシリアとセマルグルではないか。一体どうしたのじゃ？ 何かあったのか？」

「いや、そうではないのだ。むしろ、何もなさすぎて一旦戻って来たのだ」

「ん？ それは一体どういう事なのじゃ？」

バステトさんが不思議そうにしているので、ひとまず事情を話す。

彼女は、うんうんと大きく頷いており、シルヴァの考えに共感しているようだ。

「まあ探索に出ると言って、ただのピクニックでは、肩透かしに感じてしまうのじゃ」

「そういうものなんですか？」

「妾も別に戦いたいわけではないし、ゴロゴロとマヘスと日向ぼっこしている方が好きなのじゃが、何かを狩りたいという気持ちはわかるのじゃ」

まあバステトさんは猫の神様だもんね。小動物や昆虫、鳥なんかを狩るイメージがある。バステトさんというより、猫に……だけだ。

「まあなんにせよ、セシリアが戻って来てくれて助かったのじゃ」

「えっ!? 家で何かあったんですか!？」

「うむ……実は、昨日の夕食を焦がしてしまったのじゃ。それで、マヘスがちよつと不機嫌なのじゃ」

バステトさんの調理方法は、太陽光を集めて光線を石に放ち、それによる熱で調理するというもの。焼き加減の調整は至難の業と言える。

って、よく考えたら、家には調味料や小麦粉なんかもあるけど、ヴォーロスがいらないからオーブンが使えないんだ。

コボルトさんたちが作ってくれたカマドがあるので、そこでも作れるけど……せつかなのでバステトさんに手伝ってもらおうかな。

「バステトさん。では、一緒にお昼ご飯を作りましょうか」

「ふむ。以前に出してくれた石を使うのじゃな？」

「ええ。気付かなくてごめんなさい」

「いやいや、妾も忘れておつたのじゃ。それより、早速始めるのじゃ」

というわけで、バステトさんと共にキッチンへ行くと、お昼ご飯を何にするか相談する。

幾つか案が出たけど、持ち運びやすさを考え、今日のお昼ご飯はキッシュを作ることにした。

手早く小麦粉をこね、他の下ごしらえも済ませたところで、バステトさんに声を掛ける。

「では、先に生地を作りたいので、手伝っていただけますか？」

「もちろんなのじゃ。任せるのじゃ」

必要な材料を手にバステトさんと家の裏へ行くと、具現化魔法で鉄板くらい大きさがある、平らな石のテーブルを作り出す。

前に作った時よりも少し大きくしたけど、大丈夫かな？

「バステトさん。こんな感じでいかがですか？」

「うむ。問題ないのじゃ。早速始めるから、離れておるのじゃ」

私が距離を取ると、前にやってみせてくれたように、バステトさんが天を仰ぎ、その直後に白い光が石に降り注ぐ。

……うん、やつぱり熱そう。

その上に油を引いて、準備しておいた生地を広げると、じゅうつと焼ける音がある。

これを起金——へらでひっくり返し、しっかりと火が通ったところで、型にはめて形を整え、底となる箇所にフォークで穴を空けていく。

更に、先程の石の上で野菜を炒め、火が通ったら、卵やチーズと一緒に混ぜて、先程の型の中へ流し込む。あとは、いつもはオーブンで焼きあげるんだけど、代わりにこの石で蒸し焼きにするだ

けっ！

「バステトさん、ありがとうございます。後は待つだけです」

「それは良かったのじゃ。では妾は、ひと眠りしてくるのじゃ」

ええ……寝すぎじゃないかな？ 大丈夫？

いやまあ、猫だからって言われたら、それまでなんだけど、いろいろと不安になりつつも、夕飯——キッシュへの火の通り具合を確認する。

いつものオーブンなら、だいたいこれくらい……ってわかるんだけど、この調理方法は初めてだからね。

暫く様子を見て、そろそろというところで、焼けた石の上からどけて……完成した。

でも、昼食にはまだ早い時間なので、どうしようか。バステトさんと一緒にお昼寝でも良いんだけど……そうだ！ せっかくセマルグルさんがいるんだし、手伝ってもらおう！

「セマルグルさん。お昼ご飯まで少し手伝って欲しいことがあるんだけど……」

「ふむ。どうしたのだ？」

「コボルトさんたちの街まで連れて行って欲しいなって思ってる」

「その程度のことか。わかった。私の背中に乗るが良い」

セマルグルさんが快諾してくれて、あっという間に目的地へ。

やってきたのは、このコボルトさんたちの街。

電車のレールをよく行くところに気軽に足を運べるように敷いているんだけど、ひとまずここが終点になっている。

そのレールを延ばしたいのよね。

毎日とは言わないけれど、家のお風呂ではなく、温泉に浸かって身体しんの芯しんから温まりたいって思うはず。

そんな時、電車ならみんなで一気に行けるし、帰りに湯冷めしなさそうだし、移動に凄く適している。

というわけで、コボルトさんたちの街まで延ばしてきたように、具現化魔法を使って東にレールを延ばしていき、緩やかに北東へカーブさせていく。

黙々と作業を進めて行き、お昼になったので一旦家に帰って、セマルグルさんとバステトさん、マヘスと一緒にキッシュを食べる……って、違った！

「せ、セマルグルさん！ お弁当っ！ お弁当を持って行くの忘れてたっ！」

「おっと、そうだったな。では急いで残りを食べるとしよう」

「せわしないのじゃ。もっと、ゆっくりしていけば良いのじゃ」

バステトさんに呆れ顔を向けられながらも、急いで昼食を食べ終え、お弁当を持ってセマルグル

さんに飛んでもらう。

コボルトさんの街を越えて少しすると、事前に打ち合わせしていた通り、狼煙が上がっていたので、それを目印めじるしにセマルグルさんが下降していく。

「みんなー！ 遅くなってごめんねー！」

着地したセマルグルさんの背中から降りると、シルヴァが短剣の手入れをしていて、ユーリとヴォーロスは思おもいっつきり眠ねっていた。

まあシルヴァが起きているから、大丈夫なの……かな？

「セシリア、ありがとう」

「えっ!? セシリアが来たの？ ……セシリアー。遅いよー！ ユーリお腹空いたー！」

「まあまあ。セシリアたちにも事情があったんだよ」

シルヴァがお礼を言ってくれる一方で、ユーリはちよつとご立腹。ヴォーロスはフォローしてくれただけ……ごめんね。

ただ、レール敷設に夢中で、失念していただけなんだよ。

キッシュを切り分けつつ、午前中の様子を聞いてみる。

「そうだね。僕とユーリだけだからか、魔物が寄って来るようになったね」

「ユーリとしては、来なくても良いんだけどねー」

「まあ、朝に話した通り、本当に危険だと思ったら、すぐ助けに行くよ」

シルヴァとユーリとヴォーロスがそれぞれ話してくれたけど、今日は普通に魔物が現れたらしい。シルヴァ曰く、魔物や動物は強者の気配を感じ取って、姿を隠すのだとか。

なので、ヴォーロスが少し離れてついてきているということもあって、進行方向には魔物がいるけど、後方——ヴォーロスがいる方からは魔物がやってこないよ。

そのため、挟み撃ちとかになることもなくて、魔物が現れても落ち着いて対応出来るという話だった。

そして、シルヴァが言う。

「とういわけで、これが午前中の成果だよ」

「わあ。お肉がいっぱい」

「ちゃんと血抜きとかの下処理も済ませてあるから安心してね」

「ありがとう、シルヴァ」

お肉を沢山もらったので、また夜ごはんに使わせてもらおう。

そんな話をしつつ、食事を終えたら朝と同じ様にシルヴァたちに防御魔法を掛け、それぞれの活動を再開する。

ちなみに、もう森が目前まで迫っているので、ダークエルフさんたちの闇魔法対策で、魔法を防

ぐ防御魔法にしておいた。

私は、一旦家に帰って冷蔵庫へお肉をしまつて、レール敷設を頑張り、夕方になる前に家で夕食を作る。

「また魚が食べたいのじゃ」

「おさかな、おさかなー!」

「うーん。シルヴァに相談してみるわね」

バステトさんとマヘス君の希望を聞きつつ、またもやセマルグルさんにシルヴァたちがいる場所まで送ってもらうと、作ってきた夕食を今度はみんなで頂く。

それにしても……もう森の中へ足を踏み入れているけど、ここはダークエルフさんたちが棲むという、迷いの森なのだろうか。

就寝時に方向感覚を狂わせる闇魔法を受けたとしても、眠っているだけだし、いつも通り物理的に近付けなくなる防御魔法で大丈夫だよな？

そんなことを考えながら、具現化魔法で石の家を作り、みんなで就寝することにした。大きな家も良いけど、みんなで固まって寝るのも良いよね。

「イゴール！ 大変だっ！」

狩りに使う矢を作っていたら、叔父が凄い勢いでやって来た。

「叔父さん。どうかしたんですか？」

「どうかしたとか、そんなレベルじゃない！ 急いで来てくれ！ ……あっ、その弓矢は絶対に置いて行ってくれ。他にも武器の類は外すんだぞ！」

「ええ……何事なんですか？」

「走りながら話す！ 良いか？ 族長が出掛けている今、我らダークエルフの里の次期族長としての判断が求められる事態だ。とにかく急いで装備を外せ」

そう言いながら、叔父も腰に吊るしている短剣を外し始めた。

「どうやら、ただならぬ事態だということはわかったので、言われた通りに俺も武器の類を外していく。」

「武器は全部外したな？ 行くぞ！」

叔父が走り出したので、俺もその後に続いて走って行く。

「それで、何があったんですか？」

「ライトニング・ベアが出た」

「——っ!? し、神獣じゃないですかっ!」

マズい。ライトニング・ベアは、この地で絶対に関わってはいけない存在だ。近付けば最強の爪と牙で攻撃され、離れれば強力な雷魔法が飛んでくるという。

ただ幸いなことに、敵と見做されなければ攻撃されないという話を父から……族長から聞いている。叔父が武器の類を外せと言ったのは、このためか。

「どうして、この森にっ!?!」

「どうやら、人間が連れて来たみたいだ。観察していたが、我らの森に侵入してきた人間をつかず離れず追っているようだ」

「じゃあ、その人間を始末すれば……」

「いや、早まるな。もしかしたら、狩りを楽しんでいるのかもしれない。ライトニング・ベアが本気を出せば、人間如き、逃げられるわけがない。わざと逃がして楽しんでいるのに、その獲物を横取りされたと思われたら……」

「な、なるほど」

確かに、里の者の中には獲物に止めを刺さずに、弱り切って動けなくなるまで追い詰めるという

者もいる。

俺には理解出来ないが、そういうことを楽しむ者がいるのも事実だ。

しかし、だからと言って、ダークエルフの森に入ってきた人間を野放しにしておくのも良くない。もしも、この奥にある神から守るようになると言われた『聖木』を狙う者だったら、すぐにでも殺さなければならぬが、そうしたらライトニング・ベアが……って、そうだ！

「魔法は試しました？ 迷いの魔法を」

「もちろんだ。だがどういいうわけか、あの人間は俺の魔法を防いだんだ」

「防いだ？」

「その通りだ。魔法は間違はなく発動した。だが、その魔法が人間に届く前に、消失したんだ」

「どういことだ？ 未熟な者が発動したのならば有り得なくもないが、叔父はこの里で最も間魔法に長けている。」

それなのに、魔力の乏しい人間がそれを防いだなんて……これは、何かあるな。

「もしかしたら、何処か別の大陸から来た斥候なのでは？ 何か特殊なものを使って、魔法を防いでいる気がします」

「それはそうかもしれないが……待て。あれだ。中途半端な速度で走っているだろう？」

「確かに。軽く走ったと思ったら、突然止まって、また急に走り出した」

「それは、さっき言った前にいる人間が魔物に遭遇して、戦っていたからだろう」

叔父の分析通りであれば、やはり前にいる人間をどうにかして森から出すべきだな。

「とりあえず、隠蔽魔法で姿を消しておきましょう」

「そうだな。やらないよりはマシだろう」

先に叔父の姿が消えた。それを見て俺も隠蔽魔法を使用する。

隠蔽状態同士は互いの姿が見えるので、意思疎通は問題ない。

とはいえ、この魔法がライトニング・ベアにどれだけ有効かはわからないので、これ以上は近付かないが。

暫く様子を見てみると、ライトニング・ベアが突然走り出す。

何事かと思ったら、前方に森の主であるダーク・ヴァイパーがいた。

恐ろしい戦いになると思ったのだが、ライトニング・ベアに気付いたダーク・ヴァイパーが……
「目散らして逃げた!!」

「我らの戦士の中でも精鋭と呼ばれる者が十人掛かりでやっと追い返せるという森の主が、近付いただけで逃げるとは」

「やはり絶対的な存在ですね。決して近付かないようにしなければ」
それから少しすると、前方で人間が火を熾し始めた。

時間的に野宮の準備なのだろうが、どうやら後ろから歩いてくるライトニング・ベアに気付いていないらしい。

「……イゴール。あの人間には悪いが、見捨てるぞ」

「仕方ありませんね。言い方は悪いですが、人間がやられれば、ライトニング・ベアはどこかへ行ってくれるでしょうっし」

これから起るであろう惨劇を想像しながらも、次期族長としてライトニング・ベアが森を出るところまで見届けなければと思っていると、想定外のこと起る。

「……イゴール。俺は目がおかしくなってしまったのだろうか。人間の男が、ライトニング・ベアと談笑しているように見えるんだが」

「大丈夫です。俺にも同じ光景が見えています」

一体、何が起っているんだ!? あのライトニング・ベアが、人間が熾した焚き火で暖を取りながら、夕食の話をしている。

ライトニング・ベアが人の言葉を話すなんて聞いたことがないし、そもそも人間は獲物ではなかったのか!?

「……もしかして、あのライトニング・ベアは偽物なのでは?」

「……有り得ますね。あの姿をしていれば、魔物たちも我々のように恐れをなして逃げてもおかし

くない」

「思い返してみると、ずっと後をつけていたのは追い詰めていたわけではなく、護衛していたという可能性もあるな」

なるほど。確かにレーシーという森の精霊は、姿を自由に換えられると聞いたことがある。

だが、そのレーシーは人間を害することはあっても、手助けするような精霊ではないはずだ。

「よし! 化けの皮をはいでやる!」

「待ってください! 叔父さん。もう少し様子を見ましょう」

「……イゴール。少し慎重すぎないか? あのように、ライトニング・ベアが人間と話している時点で、偽物だということは間違いないぞ?」

「ですが、本物だった場合のリスクが大きすぎます」

「それはそうかもしれないが……」

今にも飛び出しそうな叔父を宥めていると……木の上から何かが降りてきた?

「みんなー! お待たせー!」

人間の女性を背に乗せたグリフォンだ?!

そ、そんなバカな話があるだろうか。グリフォンから降りた人間が、バスケットから料理を取り出し、ライトニング・ベアと談笑しながら食事をするなんて。

こんな誰に話しても、絶対に信じてもらえないだろう。

「あ、そうだ。シルヴァ。バステトさんがお魚を食べたいって」

「うーん。この辺りに川でもあれば入って獲ってみるけど……どうかな」

「そっかー。仕方ないわね」

どうして、ライトニング・ベアとグリフォンに囲まれて、食事の話なんか出来るんだ!?

「ただ、グリフォンが空から降りてきたのは間違いないので、あれが偽物だということはありえない。」

となると、考えられるのは……あの人間のどちらか、もしくは両方が、神獣たちを操っているのか!?

「イゴール。どうする？ 悪いが、もう俺にはどうすることも出来そうにない」

「……夜に本物かどうか確認してみますか？」

「出来るだろうか？ いや、やるしかないな」

叔父と共に夜までここに潜むことを決意したタイミングで人間たちが食事を終えたようで……突然、石の家が現れた!?

しかもこれは……境界!? ち、近付くことすら出来ないだつ!?

やはり、神獣たちは本物だ。

こうなったら……最後の手段だ! もう、あれしかないっ!

「叔父さん。ここは、あの手でいきましよう」

「イゴール。何か策があるのか？」

「ええ。出来ればやりたくはありませんが、仕方ありません。きっとこの手段に、父上……族長は反対するでしょうが」

俺の言葉で何をしようとしているのか、叔父も理解したらしく、大きく溜息を吐く。

「そっか。あの手を使うのか」

「ええ……全面降伏です」

「……いや、神獣から我らの里を守るためだ。イゴールの決断を尊重しよう」
そう言って、互いに目を合わせ……項垂れる。

「ダークエルフを守るため、次期族長として、やれることをやろう。」

第二章 ダークエルフの森

翌朝。ヴォーロスの上で目を覚ましたんだけど、いつも私よりも遅く起きるはずのユーリの姿が

ない。

どうしたのだろうかと思つて外に出てみると、セマルグルさんの傍でユーリが震えていた。

「ユーリ。どうかしたの？」

「セシリアー！ あ、あのねっ！ 大変なのっ！ たくさん……二十体くらいの何かに囲まれてるのっ！」

「ええっ!? 囲まれているって……何に？」

「わかんないよー。ユーリの索敵魔法は、居場所はわかってても、それが何かまではわからないもん」

なるほど。正体不明の何かに囲まれているので、セマルグルさんの傍にいるんだ。

ヴォーロスは寝ちゃっているもんね。

以前に、ルーファス王子が騎士さんたちを大勢連れて来た時は、ヴォーロスもユーリも起きなかつたけど……今回は朝方だから気付いたのかな？

「ふむ。セシリアよ。確かに何かがいるが、私の傍にいと良い。何が来ようとも、守ってみせよう」

「ありがとう。とりあえず、ヴォーロスとシルヴァを起こしてくるわね」

早朝という程でもないし、いつもより少し早いくらいの時間だけど、二人を起こすと……何故か

どちらも落ち込んでいた。

「うう……今度、同じようなことがあつたら、絶対に起きてセシリアを守るって誓つたのに」

「くっ……冒険者時代は、危険が迫っていたら、飛び起きていたというのに。感覚が鈍つてしまつている……！」

「ま、まあまあ。石の家の中だったし、まだ周りも防御魔法の外にいるから」

ヴォーロスとシルヴァに声を掛けながら、周囲を見渡せるように石の家を消すと……周りにいる一人が姿を見せ、話し掛けてきた。

「失礼します！ 我らは、この森に住むダークエルフでつ、代表のイゴールと申します。神獣様たちにご挨拶をさせていただきたく、集まつた次第です」

なんかすぐく緊張しているみたいで、甘噛みしているわね。

とりあえず、大事なことを確認しておかなきゃ。

「ん？ えーっと、私たちに危害を加えようとしていたのでは？」

「め、滅相もございません。その証拠に、我らは武器の類を何一つ持っておりません」

姿を現したイゴールさんという人は、褐色の肌に銀髪で、耳が長く、ダークエルフという言葉にぴったりの容姿をしている。

更に、何も持っていないことを示すように両手を広げていた。